

医術開業試験委員渡辺晋三先生について*

瀬戸俊

**

まえがき

先生の来歴、遺徳については多くの記録に示されておるので、本稿としては重複せざるを得ぬ個所もあるとしても、出来る限りこれらに触れぬよう努力したいと思っている。幸いにして先生の令孫脇屋和夫氏により資料、口述の提供などを得、ほぼ目的を達することの出来たことは幸運であった。

先生の生ひ立ち業蹟については、歯科医事衛生史前巻に明記されているので、これを割愛し脇屋氏提供のものを、主として取りあげ執筆したいと心得えたのである。前記書によれば、先生の夫人は備中成羽侯山崎治正の娘元子とあるが、過去帳によれば「毛登」というのが、眞実であるとのことである。脇屋和夫氏は、先生の長女豊子の二男に相当し、先生の家業を継ぐ者としては、唯1人の生存者である。

医試開業試験を辿る

明治9年医師試験規則が各府県で実施され、口中科も含まれていた。明治16年医術開業試験規則が制定され、歯科は一科専門で施行するようになった。歯科受験資格は2カ年修学したものである、しかし歯科教育制度は誠に不備にて、開業医家における徒弟制度によった。これが発展して講習会がもたられ、学校教育の初となつた。明治40年に至り、従来の歯科解剖及生理、歯科病理及治術、歯科用薬品、歯科用器械に口腔外科が追加された。次ぎに先生の辞令を紹介することにより試験委員としてのありがたさを推察し得ると思う。

渡辺晋三試験委員辞令

明治20年第2回京都医術開業試験委員勤務につき為手
當目録之通り給与

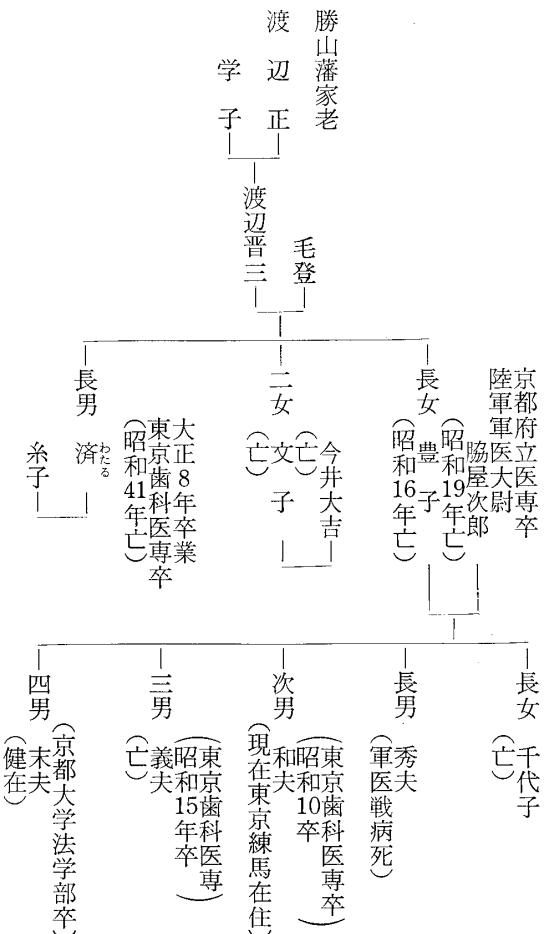
(同年11月28日 内務省発令)

同21年第1回試験委員勤務云々

(同年5月26日 内務省発令)

* Dr. Shinzo WATANABE One of the members
of the early Medical Practice Qualification Ex-
amination Committee

** Shunichi SETO 東京医科歯科大学歯学部講師



同26年 同文 手当金25円給与

(同年12月25日 内務省発令)

同27年 同文 手当金65円給与

(同年12月24日 内務省発令)

同28年度 同文 手当金45円給与

(同年12月24日 内務省発令)

明治29年度 同文 手当金60円給与

(同年12月23日 内務省発令)

同30年度 同文 手当金70円給与

(同年12月20日 内務省発令)

同31年度 同文 手当金60円給与

(同年12月20日 内務省発令)

明治32年度 同文 手当金 119 円給与
(同年12月21日 内務省発令)
同33年度 同文 手当金 203 円給与
(同年12月24日 内務省発令)
同34年度 同文 手当金 173 円給与
(同年12月25日 内務省発令)
同35年度 同文 手当金 230 円給与
(同年12月26日 内務省発令)
同36年度 同文 手当金 200 円給与
(同年12月21日 文部省発令)
同38年度 同文 手当金23円給与
(同年12月18日 文部省発令)
同39年度 同文 手当金20円給与
(同年12月13日 文部省発令)
明治39年 4月20日 同上 内閣発令
内閣発令には正七位渡辺晋三と書かれており給与については記されていない。
明治40年度 同文 手当金50円給与
(同年12月16日 文部省発令)
明治41年度 同文 手当金45円給与
(同年12月11日 文部省発令)
明治42年度 同文 手当金49円給与
(同年12月10日 文部省発令)
辞令を見るに明治22年～25年のものと、37年のものが見当らないが、先生がその間、委員をされていたが、辞令のみ紛失したのか不明である。また明治21年～35年までは内務省、明治36年以降は文部省より発令されており、同39年は内閣辞令が発せられておるのが特色である。また同42年12月発令のものが最後であるが、先生は同年8

月癌腫に罹り、12月11日逝去されている。そして発令は12月10日となっておる。なお当日從6位の紋勲の文字の入っているのが感銘深い事柄である。

給与に関しては31年までは各年度異なるが、平均金100円以下で、明治32年に金119円、翌年203円となり、その次の年に金173円、同36年に度金200円となっている。然れども明治38年度に至り金23円になっているが、この場合他に副給与があったかは明確でない。すなわち平均金200円位の辞令が2通あり、その一部が残っているのか、当時の省給与令内規を見ないと判明しないことである。

あとがき

1) 家系については成書に見ないものであり、先生の子孫の在りかたを知るも、また史的価値あるものと思考する。

2) 渡辺委員の辞令に於て各年度に涉り紹介したが、一部不明のものがあり、辞令もこれに伴い示すことが出来なかった。

3) 先生の辞令を見るに時として金100円～200円を超える、また或る時は金50円以下の時もあるが、辞令のありかたとして給与面で同年次に高額と低額の2通あったものか、1通ですませたものか解明出来なかった。従って此の点などにつき読者によりこれを補足し御教示賜わらば幸いである。

4) 先生の給与の低額時を見ても、相当の高級であり、高額の場合はまさに垂涎の至りである。

5) 本稿を終わるに当たり多数の資料を提供賜わった、令孫脇屋和夫氏に深く感謝の意を表する。